

「ポワティエ夏期音楽大学に参加して」

Les cours d'été de (l' Université musical) à Poitiers

瀧野 澄子

ポワティエ夏期音楽大学は、これまでグルノーブル夏期音楽大学として、グルノーブル市と、同市の公立音楽院協力のもとに開催されていたのが、今年度からフランス南西部のポワティエ市に場所を移して開かれたものである。

ポワトゥ地方の中心都市ポワティエは、パリから車で3時間、バスで4時間程の距離にあって、ポワトゥ風ロマネスク様式といわれる美しい教会があり、11世紀から12世紀頃の古い教会や建物が多く、みごとな石造りの静かな街である。

これまで開講されていた科目は、フーガ、ピアノ、ヴァイオリン、チェロと、ピアノの特別公開講座であったが、これに加えて、声楽と、ソルフェージュが、今年度より初めて開講されることになったものである。

講習の期間は7月19日から8月6日までの3週間で、参加者は実技レッスン、授業、特別公開講座を受けることができ、レッスン、授業、練習はポワティエ国立音楽院と、宿舎 la Maison diocésaine の教室、練習室、礼拝堂と la chapelle Henri-IV という壮大な教会の礼拝堂を使って行われた。

レッスンの回数は、ヴァイオリン、チェロ、ピアノは原則として週2回。フーガ、声楽、ソルフェージュは月曜日から土曜日まで、毎日授業、レッスンがある。

ピアノの特別公開講座は、7月19、20、21日の3日間集中的に、午後2時から6時まで、講師 VIADO PERLEMUTER 先生（パリ国立音楽院名誉教授）によって行われた。それをピアノ以外の受講生は全員聴講することができるシステムになっている。この他、受講生によるコンサートが7月20日から8月5日まで、毎夜 la chapelle Henri-IV の礼拝堂に於て開かれ、そのプログラムは、ポワティエ市の地方新聞の当日の朝刊に発表されて、演奏は一般市民に公開され、多くの音楽愛好家が集まった。

7月19日（月）開講式に引き続いていよいよ、授業、レッスンが開始された。クラスは世界各地からの参加者の混成クラスという国際ゼミナールの形式になっていて、私の受講したソルフェージュのクラスは、日本人とフランス人だけであった。

受講生全員が宿泊する寮、la Maison diocésaine の食堂では、フランス語、ドイツ語、スペイン語、日本語が飛び交い、韓国の人も一緒であったほど、国際色が豊かであった。

曲の初めに拍子、調子を云わないやり方、主和音を与えず La 音 (A音) 一音だけを与えて始めるやり方は、このシステムの聴音 (旋律、和声、和音、リズム) に共通のシステムであることに気付いた。

このやり方では、絶対音感がついているものでも、相対音感になれているものでも、音に対する感覚がしっかり身につけているものでなければ、手も足も出ない状態であった。この聴音で第一に感じたことは、音を与えてくれる先生が、誠に音楽的にピアノを弾いてくれることであった。それはいかに短い旋律であっても、あるいはブリーフとしかとれないような、短い音のつながりであっても、それが生徒に確実に音楽として受け取られるような奏法で弾かれたことである。一方生徒はその音楽の中から、リズムと調子を自然に受けとることができるように私は感じた。

このクラスでの旋律聴音は、12小節から16小節と、私達のなれているものにくらべると長く、必ず転調がいくつか入ってくるが、この転調にも工夫が凝らされている。私達のクラスは小節ごとに区切られた課題であったが、この他にフレーズングを目的にした聴音もあるということであった。

(譜例)-2 旋律聴音 tonique Fa

The musical score consists of five staves of music. The first staff shows a treble clef, a single note (Fa), and the Japanese text 'を与える' (to give). The second staff begins with a key signature of one flat (B-flat) and a time signature of 12/8. The subsequent staves contain a complex melodic line with various rhythmic values, including eighth and sixteenth notes, and rests. The piece concludes with a double bar line.

(三) リズム聴音

これも通奏のあと 2小節ずつ弾き進み、拍子、小節数は与えられない。この場合も La 音、(A音) を与えて、先生は 2音から3音を使って、ピアノでリズムを弾かれる。生徒は、そのまま実音どおりに書いてもよいし、同音でリズムをとらえて表現してもよいし、符

「ポワティエ夏期音楽大学に参加して」

頭なしで、リズムだけ書いてもよい。フランスではリズム聴音は、いつも10小節で構成されるように決められているということだ。1音で弾くやり方もあるが、パリ国立音楽院ではこの様に、2音又は3音を使って弾くシステムをとっているということであった。

全員が答え合せをして、正しく書き終るとその後で、生徒一人ずつ、2小節のリズムよみをさせられる。

(譜例)-3 リズム聴音

四 複旋律聴音

(譜例)-4 En LA

五 和声聴音

和声聴音については、音をあてることの他に、不完全和音、不協和音、など和声の知識を

③ 次の楽譜は一小節である。何拍子か



(b) 音部記号のよみ

この教育システムの中で、特に印象づけられたのは、このレッスンであった。

七つの音部記号、ト音記号、ヘ音記号（バス、バリトン）ハ音記号（ソプラノ、メゾソプラノ、アルト、テノール）がすべてよめるようにすることを目的としたもので、フランスでは固定ドだけのシステムをとっており、移動ドは使わないので、移調するとき、音符はそのまま五線の位置を動かさず、音部記号を置きかえて、音名を移していく。そのためには七つの音部記号が必然的に読めなければならないし、よむときにドの位置をずらしてよんではいけない！と、きびしく注意された。

この「よみ」というのはあくまで音符をよむことで、音高はつけない。この場合は指示されたテンポにのって、途中止まることなく、正確によめるまでやられる。

(譜例)-7

Georges DANDELLOT Manuel Pratique より



25



26



En dehors des quatre Nos suivants, écrits en clé d'Ut 3e ligne, l'élève devra travailler les exercices de lecture en triolets, en doublecroches' et en sextolets écrits en clé de Sol et en clé de Fa 4e ligne, en substituant mentalement une clé d' Ut 3e ligne à la clé indiquée

27



「ポワティエ夏期音楽大学に参加して」

28

29

30

The image displays a musical score for three measures, numbered 28, 29, and 30. Each measure is represented by a system of four staves. The top staff in each system is for the piano (p), and the three staves below are for the violin (v). The music is written in a key signature of one flat (B-flat major or D minor) and a 2/4 time signature. Measure 28 begins with a piano introduction of eighth notes, followed by a violin entry with sixteenth-note patterns. Measure 29 continues the piano's rhythmic pattern while the violin part becomes more complex with sixteenth-note runs. Measure 30 features a more active piano part with sixteenth-note figures and a violin part with similar rhythmic intensity. The notation includes various note values, rests, and dynamic markings.

(八) リズムよみ

音部記号のない楽譜を、音高をつけなくて、メトロノームで指示されたテンポで、リズムを正しく音名でよむ。音部記号は先生が指示されるので、何の音部記号のよみ、の応用にもなる。またよむだけでなく、各専攻の楽器でもすぐ演奏できるように、それ用の楽譜が用意されていて、ピアノの人はピアノで、ヴァイオリンの人はヴァイオリンで弾く。

(譜例)-8 "Solféje instrunietistes" Lecture rythmique parfée

(九) 音程の練習、視唱

音程練習のときもCから始まるのでなく、この方法にはかなりの慣れを必要とした。ピアノで初めに La 音 (A音) を与えられるだけで、課題を歌わなければならない。譜例でわかるように、この音程の課題は、無調である。

「ポワティエ夏期音楽大学に参加して」

(譜例)- 9

The image displays a handwritten musical score for a piece titled "Participating in the Poitiers Summer Music University". The score is organized into six systems, each consisting of two staves. The first system is in 4/4 time, featuring a melodic line with eighth and sixteenth notes and a bass line with a triplet of eighth notes. The second system is in 3/8 time, with a melodic line of eighth notes and a bass line of quarter notes. The third system is in 2/2 time, with a melodic line of quarter notes and a bass line of quarter notes, including the instruction "♩ = ♩ posate". The fourth system is in 2/4 time, with a melodic line of quarter notes and a bass line of quarter notes. The fifth system is in 6/8 time, with a melodic line of quarter notes and a bass line of quarter notes. The score includes various musical notations such as slurs, ties, and dynamic markings like "L 2 2" and "L 3 1".

(十) 伴奏付新曲視唱

(譜例)-10

”Solfège instrumentistes chante”

The musical score is presented in four systems, each consisting of a vocal line and a piano accompaniment. The key signature is three sharps (F#, C#, G#) and the time signature is 2/4. The tempo is marked as quarter note = 66. The score includes various musical notations such as triplets, slurs, and dynamic markings. The first system starts with a vocal line marked *mf* and a piano accompaniment. The second system features a vocal line with triplets and a piano accompaniment marked *mp sub.*. The third system has a vocal line with triplets and a piano accompaniment marked *p* and *poco*. The fourth system continues with a vocal line marked *p* and a piano accompaniment. The score concludes with a double bar line and a fermata over the final chord.

この他、短いメロディーやカデンツを弾いて、「今のは何調の何終止であるか？」と、調性と終止形の質問をされる。答えは必ずフランス語で、Cadance parfact（完全終止）Cadance plagale（変格終止）Cadance rompue（偽終止）Cadance im parfact（不完全終止）Demi Cadance（半終止）Cadance évitee（V→転調）と答えなければならない。

以上のことを順序は異なるが、毎日ひと通りやらされる。先生は、この教育内容はフランスで小学校の一年生からずっと同じ方法とをってきたと云われるが、ずいぶん課題が多く、私達のクラスも、3時間では時間不足で、授業はいつも時間延長された。

授業に対する生徒の反応は、聴音、視唱、楽典に関しては、日本人が比較的よくできるといわれたが、日本のソルフェージュ教育の中で経験しなかったもの、日本のソルフェージュ教育の中に組込まれていなかったものに出会うと、知識の中にあっても、それを音楽に応用するとなると苦しかった。とくに音部記号が変わると、とたんに読めないし、リズム聴音、リズムよみなど、なれるまでは大変な苦勞を感じた。

私達は音符を、音高を知る手段としてしかよんでいなかったもので、言葉、文字としてすぐ読む力がない。

先生は「聴音などで、かなりむづかしい音をとることができるのに、こんな簡単な音部記号のよみができないのは不思議だ！」と云われたが、そうした教育を受けた経験がなかったことは、その必要性をあらためて痛感させられた次第である。

リズムも日本の場合は、音高とリズムがいつも一緒であるため、音高に意識を奪われてリズムへの関心が、どうしてもうすくなってしまいう傾向がある。

リズムの基礎パターンは旋律聴音や視唱、視奏の中で養われ、覚えさせられていくが、それ以上進んだ、より広い応用として、リズム聴音、リズム読み、という課題を勉強する必要性を再認識した。

言葉にリズムがあるのと同じく、音の流れは必ずリズムを伴う。音の流れをよみとると同時に、リズムの動きがつかめないと、音楽として表現することはできない。特にリズムは頭で考えて理解するだけでなく、身体で感じ、表現するものである。日常生活の中にもリズムはあるし、人は誰でもリズム感覚はもっている。音楽の中でのリズムは、拍にのっていなければならない。この拍の中でのリズム表現は、音楽がすべて全身表現であるなかでも特に、身体反応を必要とする、ということも考えさせられた。

私達は中学校で、音楽の三要素は、リズム、メロディー、ハーモニーであると習った。ところが、メロディーのみ重視されたり、ハーモニーだけの聴音で終わったりして、リズム聴音という種類の教育は、重視されていなかったと反省している。

リズムの勉強は、身体が十分に反応を示すまでやるのが大切である、と切実に思い知らされた。音高のみにとらわれなくて、拍の中でしっかりした身体反応が得られるまで、ソルフェージュ教育に於て、リズムの勉強が絶体に必要である。

「ポワティエ夏期音楽大学に参加して」

リズムについても一つ。ピアノの特別公開講座を聴講して、ペルル・ミュウテル先生の指摘の中に、和音の扱い、フレーズ、指使い、ペダルの注意等と共に、tempo とリズムの注意があった。先生が手拍子を打たれて、生徒にきびしくリズムを直されるのをきいて、これはソルフェージュの問題であると思った。

次にルジェ先生から、フランスに於るソルフェージュとソルフェージュ教育の現状について伺うことができたので、その中のいくつかを書いてみる。

フランスでは文化大臣マルセル・フラルスキーが、地方へ音楽を進め人材を広くから集めるために、地方へ音楽院を沢山つくった。ポワティエ国立音楽院も音楽とバレエの2つのコースを持っているが、パリでは各区、各町ごとに公立の音楽院がある。この音楽院の先生になるには、非常にむづかしい国家試験があって、それに合格しなければならない。

フランスでは、早い人は四才ぐらいから、普通は六才ぐらいから音楽の勉強を始めるが、各音楽院では楽器（実技）を始める前に、必ず一年間ソルフェージュを習わなければ、原則として実技は始められない。

フランスの親達もソルフェージュを大変ややこしい、むづかしいものであると考えていて、あまり子供達にやらせながらないので、「ソルフェージュ」という言葉を「基礎教育」というように変えようとしているが、中味は同じである。ソルフェージュは面白くないもの！と思われがちであるが、ソルフェージュの目的は、楽譜というものをどこまで音楽としてよみとり、感じとる能力をつけるか、ということで、ソルフェージュそのものが目的ではなく、実際の音楽、音譜に密着したものでなければ生きない。楽譜、に使われるすべての記号を知るには、耳の訓練、リズムの訓練など、身体反応が必要である。これ等の訓練はなるべく子供のうちから始めるのが望ましいと先生は話された。

日本でもソルフェージュを、入学試験のためのものとか、入試課題にあることができるようになるのが、ソルフェージュの目的であるかのように考えられたりすることが多い。これではソルフェージュのためのソルフェージュで、本来の目的を達成することはできない。勿論、入学試験は専門家になるための大きな関門であり、その課題に対応する能力をもつことは大切であるが、それがソルフェージュの目的ではない。

ソルフェージュとは、ルジェ先生のお話にもあるように、実際の音楽に密着したものであり、すべて音楽するうえで生かされるものでなければならない。

父兄会からご援助をいただき、深く感謝いたします。